

「原生動物を驚かす (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

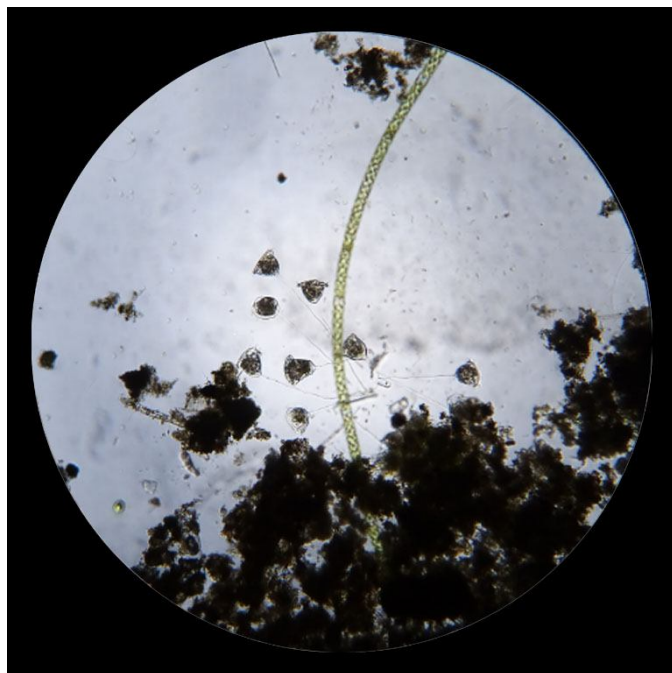
「原生動物」というのは「単細胞の動物」をさす用語(分類群)だった。私が高校生の頃は、生物は「動物界」と「植物界」の二つに分類されると教わった。キノコも「植物界」に入っていた。「原生動物門」は、動物界に属する生物のうち、単細胞のものをまとめてそう呼んでいたのだ。現在はこの概念はほぼ消滅し、単細胞の動物でも、さまざまな分類群に分かれている。しかし私はこの「原生動物」という用語の響きが好きで、あえてこの言葉を使うことにした。



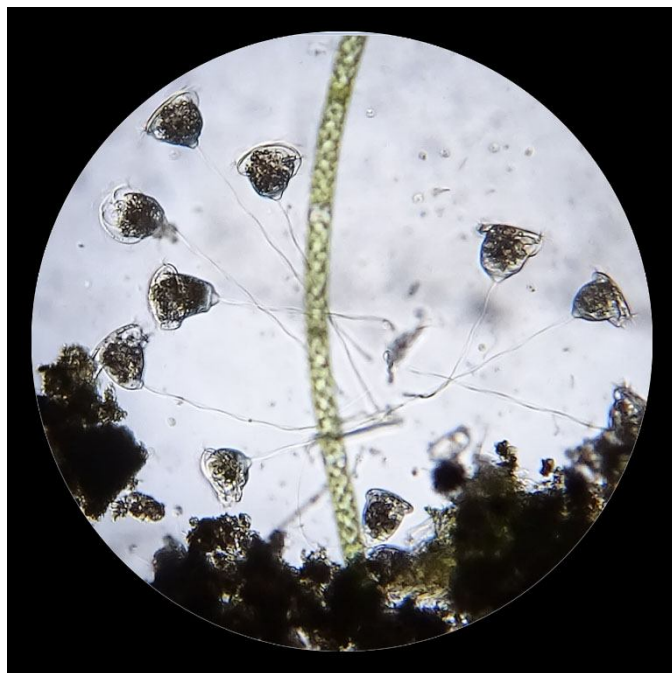
原生動物は、身近な沼や人工的な池にも、ごく普通に見られる。特に上写真のような池の底の泥には、さまざまな種類の原生動物が当たり前のように生息している。



子どもたちが採取したこの池の泥には、底着性の原生動物「ツリガネムシ」が多数いるはずである。



ツリガネムシを観察するには、スライドガラスに池の水を落とす時には、泥も一緒にスポイトに入れるのがコツである。泥やらゴミやら、雑多な挟雑物の間に、さっそくツリガネムシが見つかった。ツリガネムシは単体(1匹)で見つかることはほとんどなく、必ず群体で見つかる。



低倍率ではよくわからないが、顕微鏡の倍率を上げると、ラッパ状の生物本体から、細い針金のような「脚」が伸びて、それが一箇所に集まっていることがわかる。池の底の枯葉や細い木の枝、時にはミジンコの抜け殻などにも固着している。この「針金のような脚」も含めてたった一つの細胞で構成されているのだから驚きだ。ツリガネムシは原生動物の中でも、実に「変なヤツ」と言えるだろう。